

[体育・保健体育]

児童が主体的に楽しさや動きを見出すアルペンスキーの学習 －運動の機能的特性を手掛かりとしたワークショップ形式授業の実践を通して－

石塚 有希*

1 はじめに

頬で風を切り、広いゲレンデにターン弧を描く気持ち良さ、深雪のフワフワとした浮遊感を得ながら滑る面白さ、微妙な起伏に合わせてバランスを取って滑るスリル…。自然を相手にするスキーは、取り巻く状況が常に変化していくが、その分楽しさは無限に存在すると考える。「克服」、「達成」、「競争」と多様な機能的特性のあるスポーツであり、雪質や地形、斜度に合わせて試行錯誤しながら滑ったり、新しい滑り方に挑戦したり、仲間と競ったりといつも決まった方法ではなく、自然に対応し楽しむことがスキーの醍醐味である。

平成29年改訂学習指導要領¹⁾では、これまで「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成」²⁾と示されていた目標が、「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成」と変わり、より生涯にわたってスポーツを楽しむ基礎的資質の育成を明確化している。スキーは、一人一人の能力や興味に応じて楽しむことができ、どのようなライフステージでもそれぞれに適した方法で実施、継続できるスポーツである³⁾。また、雪が降る地域だからこそ取り組めるスキー学習は、新潟の冬の自然条件が過酷な生活環境を自ら好ましい生活環境へと作り変える能力を育成し、平成29年改訂学習指導要領¹⁾に「学びに向かう力」として示されている「楽しく明るい生活を営む態度」を養う可能性が大いにある。このような観点から、生涯スポーツの基礎的資質の育成を図るための教材として大きな効果があると考えられる。

新潟県教育委員会の調査によると、平成30年度の新潟県内の小学校のアルペンスキー学習の実施状況は、授業として取り組んでいる学校が46%、行事として取り組んでいる学校が40%であり、クロスカントリースキーの実施状況と比較しても多い状況であった⁴⁾。学習の進め方としては、学習者を技能⁵⁾の習熟度別グループに編成し、指導者が技術⁵⁾を伝達する形で進める方法が多い。日本スキー教程⁶⁾では、アルペンスキー学習では、技術課題によって選択される斜面が違うこと、常に難度の異なる斜面を移動しながら学習活動が行われることなどから、安全性の確保、指導の能率や効率のよい技術学習を進めるために、それぞれの基準が概ね同じ学習者でグループ構成することが一般的であるとしている。

しかし、自身の指導を振り返ってみると、児童を何とか滑れるようにしようと技術の伝達に終始し、アルペンスキーには多様な楽しみ方があるにも関わらず、指導のアプローチが限られていたため、児童にアルペンスキーのもつ様々な機能的特性を味合わせる事が十分にできていない傾向があった。また、技能の習熟度別グループでの伝達型の指導では、児童一人一人の興味や思考に沿った指導が難しく主体的な学びを引き出しづらいと感じていた。

平成29年改訂学習指導要領解説¹⁾では、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成のためには児童の発達の段階、能力や適性、興味や関心等に応じて、運動の楽しさや喜びを味わい、自ら考えたり工夫したりしながら運動の課題を解決するなどの学習が重要であると述べられている。

そこで、アルペンスキー学習においても、児童がより主体的に活動し、楽しさを味わうことが必要であると考え、児童自身が自分の技能や興味・関心に合わせて学習する場を選択したり、アルペンスキーのもつ様々な機能的特性に触れたりできるような学習の進め方を模索することにした。

2 主題設定の理由

(1) 機能的特性に触れる学習の可能性について

アルペンスキーの機能的特性について、日本スキー教程³⁾では、中核的なスキーの楽しさを克服、達成、競争の各欲求の充足としている。そこからアルペンスキーの機能的特性とそれに基づく児童から見た楽しさとして考えられるものは、表1に示した通りである。

菊⁷⁾は、運動の機能的特性とは、運動がもたらす可能性のある「おもしろさ」「楽しさ」といった「働き」、「機能」を第一義に捉えようとするものであるとしている。その上で、プレイの特性からその自由性のある活動は、学習者の運動参加への自発的・

*十日町市立十日町小学校

表1 アルペンスキーの機能的特性と児童から見たアルペンスキーの楽しさ

アルペンスキーの機能的特性	児童から見たアルペンスキーの楽しさ
克服型 滑降コースなどの自然条件（地形、斜度、雪質、斜面の状態など）や人工的に作られた物的障害に挑戦する楽しさ	・自分の力で斜面を滑り降りることができると楽しい。 ・いろいろな斜面やコースを滑れると楽しい。
達成型 いろいろな滑り方や記録に挑戦する楽しさ	・新しい滑り方ができるようになると楽しい。 ・タイムなどの記録がよくなると楽しい。
競争型 人と勝敗を競う楽しさ	・友達と滑る速さや跳んだ距離を競うと楽しい。 ・ゲームをして勝敗を競うと楽しい。

自主的な態度と結びつき、それを育成し、洗練していく可能性があることから、生涯にわたって運動にかかわろうとする基礎的な運動学習が小学校においても展開される可能性を開くと述べている。

嘉戸・立木⁸⁾は機能的特性の明確な運動種目を体育の年間計画に取り入れることにより、児童が運動のもつ本質的な魅力や意味を知り、生涯にわたる愛好的な運動への態度が形成される基盤になると述べている。

以上のようなことから、学習を進めるにあたって、アルペンスキーの機能的特性をどのように児童に触れさせるかが、楽しさを味わうための大きな手掛かりとなると考えた。

(2) 楽しさの高まりと技能・技術の習得との関係について

日本スキー教程³⁾では、技術指導を「スキーの楽しさを味わうための手段であるスキー技術を指導すること」と位置づけ、技術（手段）を目的と混同して指導することは、スキーの本質的な楽しさが体験できなくなる危険性をはらんでいると述べている。大人のスキーレッスンでは、学習者が明確な目的をもっており、細かな技術指導も有効である。しかし、学校におけるアルペンスキー学習では、技術習得のみを目指す学習は子どもにとって目的や意味を見出すことが難しくなりやすい。

一方で、日本スキー教程³⁾は、技術指導に対して、学習指導という言葉を用い、「『スキーの楽しさ』の学習を指導すること」とし、「楽しさを味わうのに、技術指導が必ずしも前提にならない」としている。そして、「技術がなくてもスキーの楽しさを味わえるという体験は、技術があればもっと大きな楽しさが味わえるという学習への積極的期待を生み出す³⁾」と述べている。

また、技能について、田邊⁹⁾は、水遊びの実践において、児童が遊びに満足すると更に面白さを求めて試行錯誤を繰り返し、活動に没入する中で動きを高めたり技能面が向上したりしていくことを明らかにしている。つまり、楽しさを味わう体験がより明確な技能・技術習得の意欲に結びつくと考えられる。

3 研究の目的

以上のような理由から、本研究では、児童が自分の技能や興味・関心に応じて学習する場を選び、主体的に活動しながらアルペンスキーの機能的特性に触れることで、どのような楽しさを見出したのか、またその中でどのような技能・技術を獲得したのか考察することで新しいアルペンスキー学習の在り方について検証することを目的とする。

4 研究の内容と方法

本研究は、第3学年のアルペンスキー学習を研究対象とし、以下の方法で実践を行い、研究目的の達成を図った。

(1) 機能的特性に触れる場の設定

表1に示した、アルペンスキーの機能的特性を手掛かりとしながら、選択できる学習の場（コース）の設定を行った。それぞれの場には教師がつき、楽しみ方を提案する形でスタートしたが、3つの機能的特性は相互にかかわり合いながら変化していく可能性があることを踏まえ、活動が進む中で楽しみ方を変えたり、場を作り変えたりすることも認めることとした。そうすることで、児童が自分の思考に合わせ、楽しみ方を広げたり、新に見出したりできるようにした。

(2) 児童が自己選択できるワークショップ形式での学習の展開

田邊⁹⁾は、共感志向を学びの中核とした水遊びの実践の中で、水泳系学習に多く見られる伝達型の学習展開ではなく、ワークショップ形式の単元構成を図った。ワークショップ形式では、児童の参加が第一条件であるため、教師が構成した展開の中に児童を当てはめるのではなく、自由度が保証された中で児童自ら運動の意味を立ち上げていくことが可能になったと述べている。また、ワークショップ形式は、児童にとって、自己表出が容易にできる学びのスタイルであり、活動に向かうエネルギーを生み出す原動力の一つにもなったとも述べている。

本研究においても、一般的とされる技能の習熟度別グループでの伝達型の学習ではなく、児童が学習する場を選択できるワークショップ形式を取り入れることとした。そうすることで、児童が自分の技能や興味・関心に合わせて活動できるようにし、児童の主体的な学びを引き出したいと考えた。

(3) 授業観察と学習カードによる考察

本研究では、児童が学習の中でどのような楽しさを見出しているか、また、その中でどのような技能・技術を習得しているのか

を授業観察と学習カードの記述を元に考察することとした。授業観察は、参与観察¹⁰⁾の手法で行った。実際に指導や支援をしながら授業における子どもの動きや表情、発言などをありのままに観察するとともに、ビデオによる授業記録も行い参考にした。また、客観性を高めるために授業者以外の第3者も含めて行うトライアングレーションを取り入れた。トライアングレーションとは、授業者自身の主観的・直観的判断だけに頼らず授業者以外の人々の見方を組み入れていく分析方法である¹¹⁾。チームティーチングによる授業者に加え、第3者として参観者を加え、授業検証を行った。

学習カードは、選択した場やできたことが簡単に記入できる欄と、活動する中で楽しいと思ったことや心配なことを自由に記述できる欄のあるものを用意し、児童が感じたことを見取れるようにした。

5 研究の実際

(1) 児童の実態

第3学年2学級49名を対象に授業を行った。学校から徒歩で移動できる範囲に地域のスキー場があり、アルペンスキーに取り組む環境としては、恵まれている。ただし、学年が上がるにつれてスキー場に行く児童と行かない児童の二極化が進んでおり、生涯にわたってスキーに親しむ基礎的資質は、全ての児童に十分に育っているとは言えない状況であった。3年生は、授業としてアルペンスキーに取り組むことが初めてであったが、全く経験のない児童からパラレルターンができる児童まで、技能・技術に差があった。保護者に行った技能・技術に関するアンケートの結果は、以下の通りである。

アルペンスキーをすることが初めて：15人 坂を登ることができる：1人 プルークファーレンができる：1人
 プルークボーゲンができる：19人 シュテムターンができる：6人 パラレルターンができる：7人
 ※スキーの滑走性が上がるにつれ、スタンスがプルークからパラレルの形に近づき、コントロールできるスピードも高まっていく。したがって、パラレルに近い児童ほどスキーで滑るための技能・技術を身に付けていることが考えられる。

1・2年生でクロスカントリースキーを経験しているため、アルペンスキーをすることが初めての児童も平地で歩いたり、滑ったり、方向を変えたりすることなどができ、緩やかな坂を滑り降りたりする経験や、スキーで遊ぶ経験もあるため滑走感覚は身に付けていた。授業のオリエンテーションの際、児童が話した「アルペンスキーでやりたいこと」には以下のようなものがあり、アルペンスキーに対する期待は、多様であることが伺えた。

・坂をスキーで滑ってみたい ・スキーで曲がって（ターンして）みたい ・スピードを出してみたい
 ・もこもこの中（深雪の中）を滑ってみたい ・リフトに乗って滑ってみたい ・二の字（パラレル）で滑ってみたい

(2) 単元について

高村¹²⁾は、初心者にとってのスキーは、刻々と条件の変化する雪の上、しかも斜面という場、それに加えてスキー装備や用具など、どれをとっても特異なものばかりであるため、違和感や不安感をもちやすく、初めの段階では、この違和感や不安感の克服が大きな課題の一つとなると述べている。また、新潟県学校スキー研究会発刊の「小学校における学校スキーの学年別指導の実際」¹³⁾では、スキーの用具の扱いに慣れ、運動の初歩を身に付けることを目指す段階においては、指導の順序性を正しく認識することの大切さについて触れている。対象となる児童

表2 単元計画




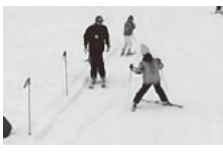
	1次 平地（ごく緩やかな斜面も含む）での学習		2次 斜面（スキー場）での学習
時	1	2	3～10
0	① 室内での学習 ・スキー場でのルール ・用具の使い方（ブーツの履き方やスキーの脱着） ・雪上での説明が難しい動きの確認	② グラウンドでの学習 初歩動作の確認 ・歩行・方向変換 ・ハの字での制動等 ↓ 身に付けた力で様々なコースに挑戦して楽しむ ・サーキット・スラローム ・だるまさんが転んだ ・ごく緩やかな斜面での滑走	緩斜面でハの字の制動を確認 ↓ 身に付けた力で様々なコースに挑戦して楽しむ ・トンネル・ポールタッチ ・スラローム・ハの字の達人 ・リフトに乗って長い距離を滑る
45		※児童が選んで楽しむ	※児童が選んで楽しむ

の約半分が初心者であることや、経験やある程度の技能・技術がある児童にとっても、今シーズン初めてのアルペンスキーとなることを踏まえ、第1次ではグラウンド、第2次ではスキー場を学習の場とし、平地での活動から緩やかな斜面での活動というように順序を踏みながら、学習を進められるようにした。ただし、アルペンスキーを安全に楽しむのに必要な初歩動作のみ、学習の初めに教師と確認する時間をとり、その後は平地においてもスキー場においてもワークショップ形式で進め、児童が今ある力で楽しむ時間を十分に取るようにした。

(3) 実践の概要と考察

① 第1次グラウンドでの実践

表3 第1次 場の設定と児童の様子 (㊟：克服型, ㊤：達成型, ㊦：競争型, ㊧：児童が獲得したと考えられる技能・技術)

場	場の設定と 手掛かりにした機能的特性	児童が感じていた楽しさ (カードの記述から)	児童が見せた動きや 獲得したと考えられる技能・技術
【サーキット(トンネル)】 	・ポールで複数のトンネルを作り、方向変換をして往復できるようにした。トンネルは、幅が広いものや狭いもの、高さがあるものや低いものなどを用意し、児童が選べるようにした。 ㊥トンネルを思うようにくぐりながら滑ることが楽しい。	・せまいトンネルをとることがおもしろかったです。 ・みんなで対決をして楽しかったです。 ・秒数で勝負して楽しかったです。 ・競争で、たし算やひき算でスタートするのがおもしろかった。 ・ほんとうは(初めは)、競争はなかったけど、とても楽しかったです。	・初めは個々にトンネルをくぐりながら滑っていたが、順番やタイムを競う競争に発展した。 ㊥バランスをとって歩いたり、スキーを滑らせたりして、移動した。→平地での移動、滑走する技能 ㊥トンネルをくぐる際、体勢を低くしたり、両スキーを揃えて推進滑走をしたりした。→バランスの良いポジションや滑走する技能
【くねくねスラローム】 	・ショートポールを立て、平地上にスラロームコースを作った。 ㊥ポールに合わせて曲がりながらゴールを目指すことが楽しい。 ㊥速く滑れると楽しい。	・ほう(ポール)をこえて、すぐ楽しかったです。	㊥ポールに合わせてスキーのトップを開きだし、進む方向を変えたり、方向変換したりした。→方向を変える技術やターン運動の内スキー操作。スキーの回旋・角付け・荷重の移動
【だるまさんが転んだ】 	・「だるまさんが転んだ」をスキーで行った。また、「転んだ」の合図で「ジャンプする」「止まる」「転ぶ」など動作にバリエーションを付けた。 ㊥いろいろな動きに挑戦することが楽しい。 ㊥お題に合わせて進み、オニのところまで行けると楽しい。	・「だるまさんが転んだ」の他に、「止まった」や「ジャンプした」があっただけじゃなかったです。 ・いろいろな動きをして楽しかったです。 ・自分で転ぶのがおもしろかったです。	㊥「だるまさんが」の間にスピードを出してスキーを滑らした。→推進滑走やスケーティングなど滑走する技術 ㊥「転んだ」でスキーをハの字に開きだし、ブレーキングした。→制動技術 ㊥スキーでジャンプをした。→バランスの良いポジション ㊥安全な方法で転んだり、すばやく立ちたする。→転倒時への対応
【坂コース(めざせびったりゴール)】 	・ごく緩やかな斜面を滑り、目印のところで止まることを目指す場を作った。登行が難しい児童もいたため、足元が滑りづらいゴム製のマットを敷いて登りやすくした。 ㊥スピードをコントロールして、目印まで滑ることができると楽しい。 ㊥目印に近いところで止まると楽しい。 ㊥誰が一番近くで止まれるか競争すると楽しい。	・スピードを出して、コースを速くすべれたのが楽しかったです。 ・坂のところにポコッとになっている場所があって、ジャンプして楽しかったです。 ・坂をおもいきりすべれて楽しかったです。 ・急に止まるところがおもしろかったです。	㊥パラレルスタンスから滑り出し、目印に向かってブルークスタンスに変化させる。→滑降技術や制動技術、スピードのコントロール ㊥目印付近でスキーのテールを押し出し、ハの字の大きさを変化させて制動をかける。→制動技術

児童は、クロスカン트리スキーの経験等で身に付けていた技能・技術や、学習の初めに教師と確認した初歩動作のための技術を使い、いろいろなコースを自分で選択して楽しんだ。「サーキット」や「くねくねスラローム」のコースでは、初めは、トンネルを上手にくぐったり、ポールに合わせて曲がったりしながらゴールを目指す克服型の楽しみ方をしている姿が多かった。しかし、慣れてくると同じコースを選んだ児童同士で、同時にスタートして勝敗を決めたり、数を数えて速さを競ったりと競争型へと発展していった。学習カードには、中・上級者の児童を中心に「競争が楽しかった」「対決が楽しかった」などの記述が確認できた。これは、児童が設定されたコースに挑戦し、機能的特性に触れる中で、新たな楽しさを見出し、活動の仕方を変化させながら楽しみが高まった一例として捉えることができる。

楽しさと技能・技術の高まりについて注目すると、児童はそれぞれの場で楽しさを探る中で、スキーをスムーズに滑走させたり、方向変換をしたり、バランスの良いポジションをとったりすることができるようになったりし、上達していた。平地において、機能的特性に触れ、楽しむことが斜面を克服するために必要な技能・技術の獲得に結びついたと言える。事後のアンケートの「いろいろなコースをまわって楽しくスキーができた」の項目では、「◎よくできた・○できた・△あまりできなかった」の3段階の評価で、89%の児童が◎の評価であり、○も含めると全ての児童が楽しくスキーができたと回答した。

技能の習熟度別に、児童がどのようなコースを好んで選択をしていたか確認すると、上級グループでは、「サーキットでの競争」と「坂コース」が多く、中級では、「坂コース」、初級では、「だるまさんが転んだ」が一番多かった。高い技能・技術があるグループほど難易度の高い場や楽しみ方をしている傾向が見受けられる。「だるまさんが転んだ」は、習熟度に関わらず人気があり、どのような技能段階の児童でも楽しむことのできる場であったと考える。平地を移動する技能があれば、誰でも遊べることや、動きにバリエーションがあること、ゲーム性があることなどが理由として考えられる。学習中の姿やカードの記述からは、どの技能の段階の児童も、ほとんどが、自分の興味・関心や技能に合わせて場を選び、それぞれのコースに挑戦する中で楽しさを見出していることが確認できた。





しかし、技能の習熟度別グループごとに楽しさに関わる評価を「◎よくできた」に絞ってみると、初級で70%、中級で100%、上級で100%であり、初級グループで低い結果となった。また、スキーに対する不安について記述している児童も、初級グループが中・上級グループに比べると比較的多かった。対象児童の実態として、技能・技術が高まるとスキーの楽しさが広がることや初心者にとってのアルペンスキーは、違和感や不安感もちやすいことが伺えた。ただ、初級・中級を中心に、スキー場で滑りたい

という思いやできるようになりたいことを学習カードの自由記述に書いている児童が多く、スキーに慣れていない児童にとっての平地で楽しむ経験は、斜面での活動への期待に結び付くとも考えられた。

この結果を受け、第2次では、児童がアルペンスキーに対して違和感や不安感を抱かないで楽しめるよう、斜面の選定や場の設定を工夫した。また、ワークショップ形式で必要な初歩動作について、学習の始めに教師がついて、やり方を確認することにした。

② 第2次スキー場での実践

表4 第2次 場の設定と児童の様子（㊟：克服型、㊤：達成型、㊦：競争型、㊧：児童が獲得したと考えられる技能・技術）

場	場の設定と手掛かりにした機能的特性	児童が感じていた楽しさ（カードの記述から）	児童が見せた動きや獲得したと考えられる技能・技術
【トンネルコース】 	緩斜面と中斜面に、ポールやフラフープでトンネルを作った。トンネルは直線上にセットしたり、左右交互にセットしたりし、斜面やコースを児童が選んで挑戦できるようにした。 ㊟トンネルを思うようにくぐりながら滑ることが楽しい。	・トンネルのギリギリまで待って、しゃがんだのがおもしろかったです。 ・ハの字のまま、しゃがんでできるようになってうれしかったです。 ・トンネルでどんどん小さくなって最後のトンネルは「ちょっかっこう」みたいに小さくなっておもしろかったです。 ・楽しかったことは、トンネルです。なぜかというとしゃがんだときに速くなって楽しかったからです。 ・（上の斜面の）トンネルでスピードがすぐ出てもおもしろかったです。	・くぐるときにおしりをついた子が、転ばないでくぐるように何度も挑戦した。 ・スキー操作に慣れている児童は、左右交互にセットされたトンネルを調子よくポジションやスピードを変化させながら滑ることを楽しんだ。 ㊦体勢を低くしようと、足首や股関節を曲げ、腕を前に出した。→バランスの良い滑降ポジション ㊧くぐるためにタイミングよく減速または、加速して滑った。→ブルークでの制動、スキーのスタンスや角付けの変化
【ハの字の達人】 	幅を変えながら、ポールを2本ずつセットした。ブルークのスタンスを変化させながら滑る場。 ㊤ポールに合わせて滑ってゴールを目指すことが楽しい。 ㊥ハの字の幅を自分で変えながら滑ることができると楽しい。	・ハの字を大きくしたり、小さくしたりするのがおもしろかったです。 ・大きいハの字だとして、小さいハの字だとゆるめのスピードが出ることが分かりました。 ・最初は、ハの字がうまくできなかったけど、大きいハの字と小さいハの字ができるようになって楽しかったです。	㊥ブルークのスタンスを変化させて滑った。→スピードコントロールの技術 ㊤セットされたポールに合わせてタイミングよくスキーを動かした。→タイミングの良い荷重や角付け
【ボールにタッチ！】 	左右に立てられたショートポールに手でタッチしながら滑る場。低いポール、高いポールのバリエーションを準備した。 ㊤ポールを触りながら滑ってゴールを目指すことが楽しい。 ㊥ポールに触るために、思うように方向を変えて滑れると楽しい。	・どんどん左右にいったのがおもしろかったです。	㊥ボール方向へ行こうとして、視線や体の向き、スキーの向きを変える。→ターン始動のきっかけ ㊤左右交互に片手でタッチするため、ポール側の膝や股関節が屈曲し、スキーに体重が乗る。→スキーへの荷重、ターン運動
【いろいろターン】 	リフトに乗って、教師と一緒に長い距離を滑りながら、ターン弧や滑る場所を選択しながら滑る。途中、ポールをコースも用意し、児童が技能に合わせて選択できるようにした。	・ポールをすべるのが少しじょうずになっておもしろかったです。 ・けっこうスピードがでておもしろかったです。 ・大きいターンができておもしろかったです。 ・リフトに乗って上からすべると今までのおさらいをしているように楽しかったです。 ・足をどこまでそろえられるかためてよかったです。	・ブルークボーゲンやブルークターン、パラレルターンなど、今できる滑り方でそれぞれ滑った。 ㊥セットされたポールに合わせて滑る。→スピードやターン弧のコントロール ㊥滑走性が良くなることで、内脚がターン方向に動き始めた。→ブルークターン、パラレルターンへの移行

第1次で、平地やごく緩やかな斜面で楽しむ時間を十分に確保したことにより、児童はスキー場での活動に期待感をもったり、斜面を滑走するための技能・技術を身に付けたりすることができた。第2次では、これまでに身に付けた技能・技術を使いながら、自分の興味・関心に合わせて活動する場を選び、新たな楽しみ方を見付けたり、自分の力を高めたりしていた。

例えば、第1次でハの字の制動ができるようになってきた児童が、第2次で「トンネルくぐり」で体勢を低くしてトンネルをくぐることを楽しむこと（克服型）や、「ハの字の達人」でコースに合わせてハの字の幅を変える（達成型）ことに挑戦することを通して、バランスの良い滑降ポジションを身に付けたり、制動のかけ方の精度が高まったりした。他にも、ハの字でまっすぐ滑ることができる児童が、「ボールタッチ」でボールに触りながら滑ることを楽しむ中で自然にターンにつながる動きをしたり、ゆっくりなら滑ることができた児童が、それぞれの場で遊ぶ中でより速いスピードでコントロールができるようになったりして、技能・技術を高めることができた。田邊¹⁰⁾は、水遊びの実践の中で、「場」において、夢中状況の中にある児童は、身体感覚を総動員させながら新しい動きを発見したり、今もっている力を高めたりしており、運動技術の獲得や技能の習得を指導の前面に押し出さなくても、関係性の中で卓越した動きを自得できていると述べたが、同じような姿が本実践でも確認することができた。

事後アンケートの「いろいろなコースをまわって楽しくスキーができた」の項目では、1次で89%だった㊦の評価が95.8%になり、振り返りカードに楽しかったことや面白かったことについて記述した児童も増加した（表3）。さらに、自分が新たにできるようになったことについて記述した児童は、47.9%であった。特に初級グループについては66.6%と高い割合となり、技能・技術が高まったことを自覚した児童が多かった。

表5 事後の学習カードの感想の記述の一部

初級児童	・ハの字で滑るときに大きいハの字だととまって、小さいハの字だとゆっくりのスピードですべれることがわかりました。 ・何度もやっているうちにハの字ができるようになって楽しくなりました。 ・ギリギリまで滑ってすぐに止まることができるようになってよかったです。
中級児童	・ゆるいしゃめんをハの字から少したて（パラレル）にできました。うれしかったです。 ・できるようになったことは、ハの字ですべれるようになったことです。楽しかったことは、トンネルです。なぜかというとしゃがんだときに速くなって楽しかったからです。
上級児童	・私は、〇〇スキー場のあんな急斜面を「冒険」で滑れるようになりました。 ・何回もやってなれているスキー場ですが、ハの字の使い方が少し上たつたような気がしました。リフトにのり、上に上がってすべると、今までのおさらいをしているように楽しかったです。

6 まとめと今後の課題

本実践では、機能的特性に触れる学習の場を設定し、児童が自ら選択して活動するアルペンスキー学習には、児童が主体的にアルペンスキーにかかわり、楽しさを見出す可能性や、楽しさを追求する中で、技能・技術が獲得されていく可能性が大いにあるということが結論付けられた。そして、3つの機能的特性の関係に着目すると、達成型、競争型で楽しむことが斜面を克服するための技能・技術につながったり、斜面やコースを克服して楽しむことが、新たな滑り方の習得や競争につながったりと、特性同士が相互に関わり合い、楽しみ方を広げながら発展していくことも確認できた。

さらには、予測しなかった楽しみ方を児童が見出す様子も多く見られた。例えば、達成型と考え設定したコースで順位やタイムを競う競争型の楽しみ方をしたり、コース上にたまたまできた突起を見付けてジャンプをする楽しさを見付けたり、スキーをコントロールすることによって生まれるスピードの変化を楽しんだりなど、機能的特性を手掛かりに場を設定したが、児童の見付けた楽しみ方はさらに多様であった。鈴木¹⁴⁾は、授業で教える運動の意味を分類に対応させて固定化してしまうと、子どもと運動の関係を考える前に、それぞれの運動を競争型とか達成型という枠に閉じ込めてしまう危険性があるとし、機能的特性の分類を絶対視してしまうことは避けなければならないと述べている。また、田邊⁹⁾は、児童が「感じる」ことを手掛かりに、自分を取り巻く関係性の中で、運動の面白さや心地よさを発見したり創造したりできる学びの在り方について問い、「場」において児童を運動に誘い込み、児童の挑戦欲求を喚起したり、夢中状況を生み出したりすることの要因の一つに「自由度があること」を挙げている。このように考えると、もともと多様な楽しみ方があり、さらにそれぞれの特性が相互に関わり合い変化しながら楽しみ方が広がるアルペンスキーでは、特性を固定化してアプローチの仕方一つに絞ってしまうことは、楽しさを限定してしまうことにつながると考えられる。本実践では、ワークショップ形式を取り入れ、児童が自ら場を選んで活動できるようにし、さらに楽しみ方を変化させていくことを認めながら進めたことが、それぞれ興味・関心や技能・技術が異なる児童の挑戦欲求に応えることにつながったと考える。

本実践では、対象児童が入門期にあたることを踏まえながら、主に斜度やコースを工夫して場の設定を行ったが、それに加え、雪質や地形、滑走スピードなどの要素を加えるとさらに楽しさが広がると考えられる。例えば、中斜面を滑ることができるようになったら、中斜面の不整地滑降に挑戦する、さらに速いスピードでの滑走や競争に挑戦するなどの活動も考えられる。常に変化する学習状況を生かし、自然と対応するアルペンスキーの楽しさを児童と共に模索していきたい。

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説体育編』東洋館出版社、2017年、pp.13, 17～23
- 2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説体育編』東洋館出版社、2007年、p.9
- 3) 財団法人全日本スキー連盟『日本スキー教程 スキー指導マニュアル編 スキー指導者必携』スキージャーナル株式会社、2009年
- 4) 平成31年度 公立小・中・特別支援学校体育主任研修会資料
- 5) 本実践では、伝達不可能で技術を使用して目的を遂行する実技的な能力を「技能」と表記し、伝達可能で、目的を達成するための手段や方法を「技術」と表記した。
- 6) 財団法人全日本スキー連盟『日本スキー教程 技術と指導』スキージャーナル株式会社、2003年、pp.10～13
- 7) 菊幸一「プレイ論と運動特性論」『新訂 小学校体育科授業研究』教育出版、1994年
- 8) 嘉戸脩・立木正「体育授業計画の考え方・立て方」『新訂 小学校体育科授業研究』教育出版、1994年
- 9) 田邊輝明「共感志向を基軸とした体育授業の創造－「場のもつ力学」に着目した「水遊び」の実践から－」『教育実践研究第25集』2015年、pp.151～156
- 10) 関口靖広『教育研究のための質的研究法講座』北大路書房、2013年、pp.15～17
- 11) 横溝紳一郎『日本語教師のためのアクション・リサーチ』日本語教育学会、2000年
- 12) 高村雄治『子どものためのスキー教本』スキージャーナル株式会社、1979年
- 13) 新潟県学校スキー研究会『小学校における学校スキーの学年別指導の実際－基礎技術の正しい指導のために－』新潟県学校スキー研究会、2013年、p.55
- 14) 鈴木秀人「機能的特性にもとづく運動の分類」『小学校の体育授業づくり入門』学文社、2009年、pp.79～83